

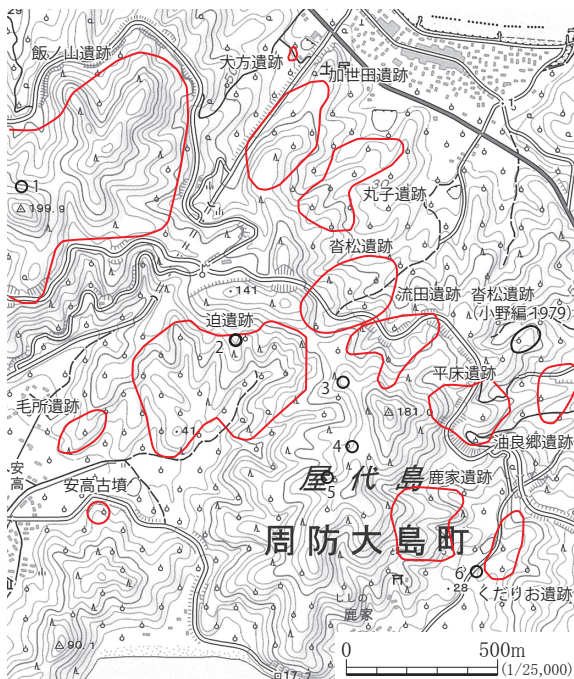
付篇5

山口県東部における弥生時代高地性集落出土土器

田畑 直彦



図51 関連遺跡位置図



- 1 飯ノ山遺跡調査地点 (岡本・工藤 1952)
 2 毛所遺跡 (中野 2004) 3 沓松遺跡A (中野 2004)
 4 沓松遺跡B1 (中野 2004) 5 沓松遺跡B2 (中野 2004)
 6 鹿家遺跡 (中野 2004)
 ○ 埋蔵文化財包蔵地 (山口県遺跡地図)

図52 沓松遺跡位置図

1. はじめに

当館は、昭和20～30年代の小野忠熙氏や当時在籍していた学生による調査に伴い、山口県東部における弥生時代高地性集落から出土した遺物を収蔵している。このうちの一部は『島田川』等により報告されているが、出土遺物が未報告のため時期比定が困難な遺跡もあり、遺跡の位置づけに支障をきたしている。そこで本稿では、上記のうち、3遺跡について時期が判断できる図化可能な土器を報告したい。

2. 沓松遺跡

遺跡の概要

沓松遺跡は周防大島町大字土居(土居地区)所在の遺跡である。標高約60～80m、比高約55～75mの丘陵地斜面に立地する。『山口県遺跡地図』による所在地は「周防大島町東安下庄字沓松奥」であるが、これは後述する安下庄地区の沓松遺跡の所在地であることから、表記は誤りであろう。また、小野・中野・山本ほか1979では、所在地が「大島郡橋町大字土居小字沓松」で、2004年の合併以前における埋蔵文化財包蔵地付近の表記であるが、図示された場所は埋蔵文化財包蔵地の約400m東側に位置する。この場所は大字油良(油良地区)であることから、上記の場所は誤りであろう。

次に混同を避けるため、安下庄地区の沓松遺跡について述べたい。同遺跡を報告した中野孝之氏は3地点に細分し、「峠のをA、谷の東側をB、Bの中でより谷間のをB1、遠のく傾斜地をB2と呼ぶことにしたい。」としている(中野1975)。図52では中野氏が示した各地点の地番のおおよその中心地を示した。B1では中野氏自身が土器小片6点を見つけたという。また、B2では磨製石剣1点が出土したとされるが、上記以外の遺物の詳細は不明である。

沓松遺跡の周辺では飯ノ山遺跡が標高約120

m、比高約115mの後期前葉・後期後葉～終末期の高地性集落である。また、中野氏の検討によると、時期不詳の高地性集落として、加世田遺跡(標高約50m、比高約45m)、丸子遺跡(標高約60m、比高約55m)、流田遺跡(標高約80～100m、比高約75～95m)、鹿家遺跡(標高約60～80m、比高約50～70m)がある。なお、迫遺跡は山口県遺跡地図では時期はその他とされているが、中野氏が報告した毛所遺跡は同氏が示した地番^{註3}では迫遺跡内にあり(図52-2)、中期もしくは後期とみられる土器底部と石鏃・石斧が出土している。この他に、山口県遺跡地図によると詳細は不明であるが、平床遺跡、油良郷遺跡も弥生時代の遺跡とされている。以上のように、土居地区と安下庄地区の沓松遺跡を含めた広範囲で弥生時代の遺跡が分布しており、今後、遺跡の所在地表記・位置・範囲について整理する必要がある。

土居地区の沓松遺跡の発見は戦前に遡る。「防長石器時代遺物発見地名表」(昭和10年9月現在防長史談会1935)によると、「日良居村・土居、沓松」で弥生土器が発見されており、発見報告者は小川五郎氏である。岡本定氏・工藤正氏が作成した「弥生式文化時代遺跡遺物発見地名表」(昭和27年4月10日現在 岡本・工藤1952)では散布地(住居址推定)、蜜柑畑で山間の凹地に位置し、標高80mで、昭和25～27年にかけて弥生土器、石剣(折片)、石鏃が出土したとされる。小野・中野・山本ほか1979では弥生Ⅲ期とされ、「詳細不明。周辺の山地にも弥生系土器片の散布地が多く、注意を要する。甕棺墓地もある。付近のほぼ同一高度に同類の遺物散布地が点在。」と記載している。また、小野1985では、「屋代島北斜面の標高80メートル、比高75mの尾根に立地するⅢ期とⅣ期の高地性集落の遺跡で、壺棺墓の存在や、ほぼ同じ高度の斜面の各所から土器の散布が報告されている。」と記載している。このほか、金関1964では筆者編年(田畑2014)の中期Ⅳとみられる甕1点の実測図が掲載されている。以上から、詳細は不明だが、中期中～後葉の集落が存在したと推定される。

出土土器

今回報告する土器は3点で、1と2・3は各々別箱に収納されている。1の収納袋には須恵器、瓦質土器片もあるが、注記がないため他遺跡出土遺物の混在である可能性がある。また、1は赤字による注記が一部消えており詳細は不明だが、同じ袋に収納されている胴部片には赤字で「日良居村沓松」注記さ



写真85 沓松遺跡遠景(北東から)



写真86 沓松遺跡近景(南東から)

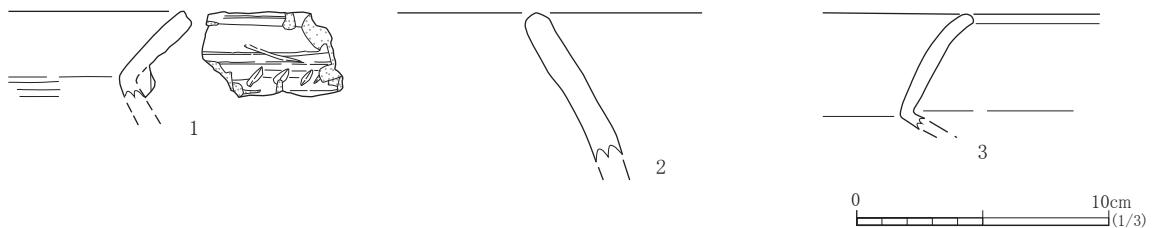


図53 出土遺物実測図(土器)①

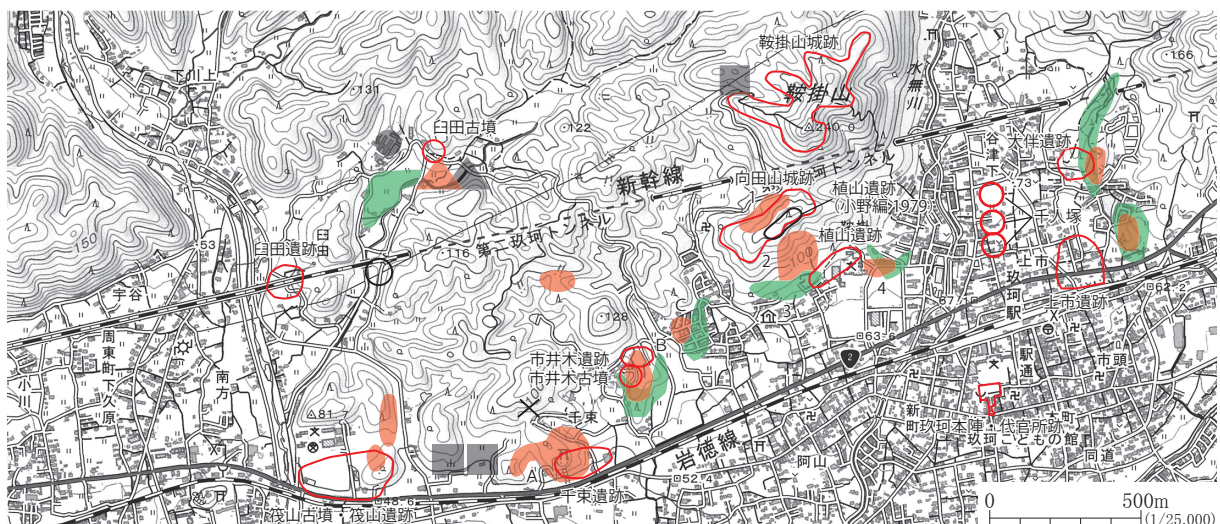
れている。2・3はラベルの注記によると、発見者～発掘者名は学術調査団で、昭和26年6月2日に出土した土器である。出土状況は「北斜面の反対側は森林となり、土器多数散布せるも比較的破片は北側より大なり」と記載されている。また、2には「日良居村沓松5」、3には「日良居村沓松2」と注記されている。以上の注記の状況から1も2・3と一連の出土であった可能性が高い。

1は弥生時代中期中～後葉の甕の口縁部で、口唇部に凹線文を1条、頸胴部界に刻目突帯を施す。2は弥生時代後期後葉～終末期の複合口縁壺の口縁部か。内外面にナデを施す。3は弥生時代終末期～古墳時代前期の短頸壺の口縁部で、内外面にナデを施す。

3. 植山遺跡

植山遺跡は、岩国市玖珂町の鞍掛山(標高240m)の南側に派生する向田山山頂から山麓の小起伏山地に所在する遺跡で、山頂の比高は約90mである。小野・中野・山本ほか1979による所在地は「玖珂郡玖珂町大字阿山下」であるが、^{註5}「大字阿山下」は「阿山上」の誤りで、現在の表記は岩国市玖珂町阿山上である。小野1953では文章による記載はないが、図版第37 島田川流域の遺跡分布図において、上記の植山遺跡周辺に「弥生式遺跡」、「土師器祝部土器出土地」がある。当館は大上孝臣氏の調査により出土し、昭和28年4～5月の日付で、1「鞍掛うらく(山頂)」、2「くらかけ中腹」、3「鞍掛 山麓」、4「くらかけ・ぬの目瓦・土器破片」のラベル注記がある遺物を収蔵している。「鞍掛」は阿山遺跡を含む植山遺跡の東側隣接地周辺の字名だが、^{註6}位置と地形から上記の1～3は図54-1～3に対応すると考えられる。また、小野・中野・山本ほか1979の位置は図54-1の南東側だが、図54-1と遺跡範囲の形態が近似するため、図54-1を転写した際、位置がずれた可能性がある。

なお、現在は山頂付近が中世城館の向田山城跡、南東側の山麓部、図54-3と4の間が植山遺跡として埋蔵文化財包蔵地に認定されている。本稿では混乱を避けるため、山頂の向田山城跡内や埋蔵文化財包蔵地外の場所も含めて植山遺跡と呼称しておく。



- ▲ 既往の縄文土器発見地 (小野 1953) ● 弥生式遺跡 (小野 1953) ▲ 既往の弥生式土器発見地 (小野 1953)
- 土師器祝部土器出土地 (小野 1953) × 既往の石器発見地 (小野 1953) ● 古墳 (小野 1953)
- 1～3 植山遺跡 (小野 1953 1: 山頂, 2: 中腹, 3: 山麓)、4 阿山遺跡 (小野 1953)
- A～C 千束遺跡 (小野 1953 A: A地区, B: B地区, C: C地区)
- 弥生遺跡 (小野 1960) ○ 土師式村落推定遺跡 (小野 1960) ○ 埋蔵文化財包蔵地 (山口県遺跡地図)

図 54 植山遺跡・千束遺跡位置図

出土土器

4～6はラベルに「鞍掛うら(山頂)」の注記があり、山頂付近から出土したと考えられる。いずれも弥生土器壺の頸～胴部で、外面は摩滅により調整不明、内面に指頭痕がある。また5の外面にはヘラ状工具による刺突が僅かに残る。いずれも器壁は7～10mm程度と厚く、やや長胴を呈するとみられる。上記は清水遺跡出土土器と近似していることから、後期後葉～終末期に位置づけられる。7・8はラベルに「くらかけ中腹」の注記があり、中腹で出土したと考えられる。中腹は急斜面であることから、山頂付近からの流れ込みとみられる。7は弥生土器壺の頸～胴部で摩滅により外面の調整は不明。頸部外面には板状工具による刺突がある。8は弥生土器壺もしくは鉢の底部。摩滅により内外面の調整は不明。やや丸底を呈する。いずれも後期後葉～終末期に位置づけられる。9～11はラベルに「鞍掛 山麓」の注記があり、山麓から出土したと考えられる。山麓は「土師器祝部土器出土地」とされており、土師器、須恵器も出土している。9は弥生時代中期中～後葉の甕の胴～底部。内外面ナデ調整で、内面にはコゲが付着する。10は須恵器甕の胴部。内面に同心円状の当て具痕があり、外面に平行タタキを施す。11は土師器皿底部。外底面に糸切り痕がある。12～16はラベルに「くらかけ・ぬの目瓦・土器破片」の注記がある。出土地点は定かではないが、須恵器、瓦質土器、土師質土器が含まれることから山麓から出土したと考えられる。なお、当館収蔵遺物には瓦は含まれていないが、山麓東側では古代の平瓦が出土している(岩国市教育委員会文化財保護課2023)。12は弥生土器で中～後期の壺もしくは鉢底部。底部は上底で内外面にナデを施す。13は弥生土器で後期後葉～終末期の甕の底部。外面は被熱し、底面中央を穿孔する。14は須恵器甕胴部。外面に平行タタキを施す。15は近世の瓦質土器火鉢の頸部、16は近世の土師質土器焙烙の口縁部である。



写真 87 植山遺跡・千束遺跡・筏山遺跡遠景(南東から)



写真 88 植山遺跡(南東から)



写真 89 千束遺跡(南から)

4. 千束遺跡

千束遺跡は岩国市玖珂町千束に所在する。丘陵地に立地しており、最高地点の標高は約75mで比高は約25mである。小野1953ではA～C地区に分けられている。このうち、A地区では須佐神社南側の参道と神社東西の道の断面、東麓の民家付近に何らかの遺構の断面とみられる堅穴が18箇所確認された。また、出土土器の時期は、「第6号の堅穴底から平底の土器の底部を得たのをはじめ、検出した少数の土器はすべて彌生式中期と見うけられるものである。」とされている(小野1953)。当館収蔵資料は、昭和27(1952)年1月30日に大上孝臣氏の調査により、A地区西部の包含層で出土したものが主体で、ラベルには「堅穴多数」と記載されている。なお、現在はA地区の須佐神社とその東側が千束遺跡として埋蔵文化財包蔵地に認定されている。また、B地区北部は市井木遺跡として埋蔵文化財包蔵地に認定されており、平成8(1996)年に墓地造成に伴い実施された発掘調査(石井1997)では、後期前葉の堅穴住居跡1棟や後期とみられる段状遺構2基、土坑1基が検出され、弥生土器、砥石、紡錘車未製品、鉄

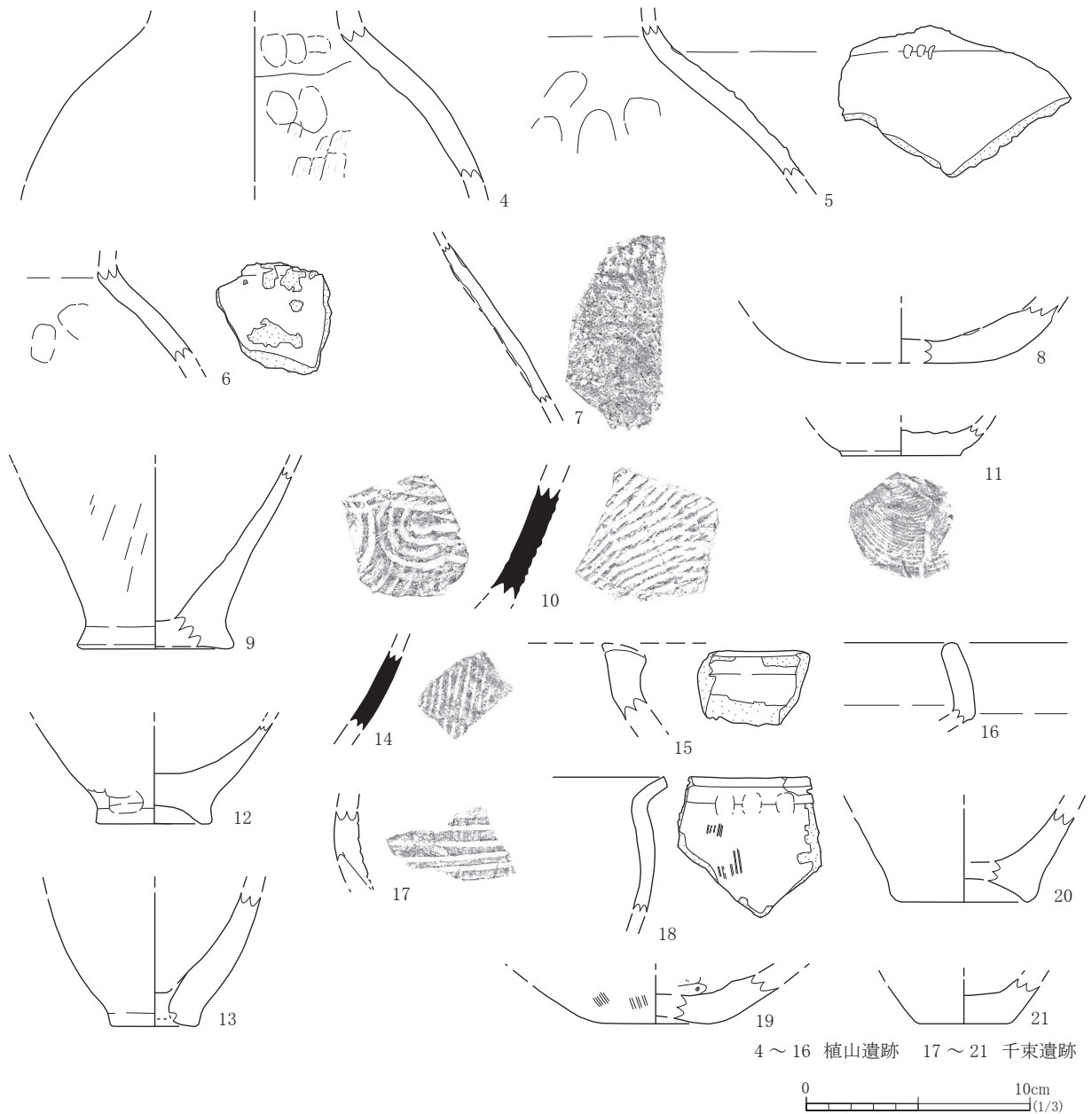


図55 出土遺物実測図(土器)②

製品(鉄鏃の茎か)^{註7}が出土した。C地区は現在、全域が宅地である。

出土土器

17～21は弥生土器。このうち19は小野忠熙氏による調査で出土した土器で、注記が一部消えているため、出土地点等は不明である。19以外は前述の通り、大上孝臣氏による調査で出土した土器である。17は前期後葉～中期前葉壺の頸部。外面に6条のヘラ描沈線を施す。18は中期前～中葉の甕の口縁～胴部。摩滅が著しいが、外面の一部にタテハケが残存する。19は弥生時代後期後葉～終末期の壺もしくは鉢の底部。外面にタテハケ、内面にケズリを施す。20は弥生時代後期の甕。内外面とも摩滅が著しく調整は不明。上底を呈し、外面は被熱が顕著である。21は弥生時代後期後葉～終末期の甕の底部。外面は被熱しており、内外面とも摩滅が著しく調整は不明。

5. 小結

今回、2では周防大島町土居地区の杓松遺跡から出土した弥生時代中期中～後葉、後期後葉～古墳時代前期の土器を報告した。また、遺跡の出土地点や範囲等を検討した結果、土居地区、安下庄地区の広域に遺跡が存在することが確認できた。今後は現地調査を踏まえて、時期別にどのように遺跡が変遷したのかを確認する必要がある。土居地区、安下庄地区に同時に集落が存在したと仮定すると、周防大島南北の海上における可視領域を確保していたこととなり、遺跡の性格を捉える上でも重要である。

3では岩国市玖珂町の植山遺跡の山頂、中腹、山麓の3箇所から出土した土器を報告した。山麓部では弥生時代中期中～後葉の土器も出土したが、高地性集落である山頂と山頂付近から遺物が流れ込んだと考えられる中腹では、後期後葉～終末期の土器が出土した。植山遺跡の山頂は標高約160m、比高約90mで、現在知られている島田川流域遺跡群の中では最も比高が高い。また、島田川流域遺跡群では比高約70mの遺跡に、溪月院遺跡、大浴遺跡、平畑遺跡があるが、いずれも植山遺跡同様、後期後葉～終末期に位置づけられる。島田川流域遺跡群の南側にはかつて存在した古柳井水道の周囲に比高100mを越える後期後葉～終末期の高地性集落である大崩遺跡、石城山神籠石、吹越遺跡などが存在する。島田川流域では比高100mを越える高地性集落は未確認だが、比高70mを越える高地性集落が出現した背景には、古柳井水道周辺に存在する高地性集落の出現と関連がある可能性が高い。なお、小野1960によると、詳細は不明だが鞍掛山の西側にも弥生時代の遺跡が存在するとされる。

4では岩国市玖珂町の千束遺跡から出土した弥生時代前期後葉～中期前葉、中期前～中葉、後期～終末期の土器を報告した。前期後葉～中期前葉及び後期後葉～終末期の土器は標高約67m、比高約22mの高地性集落である筏山遺跡からも出土している(小野1961・岩国市教育委員会文化財保護課2023)。また、小野1960によると詳細は不明だが、筏山遺跡と千束遺跡の間にも弥生時代の遺跡が存在するとされる。上記から、島田川の上流域においても、中流域と同様に弥生時代前期後葉～中期前葉に高地性集落が出現し、移動しつつ終末期まで存続したと考えられる。

以上、今回報告した土器は少量・小片ではあるが、山口県東部の高地性集落を考察する上で重要な手がかりとなるだろう。

謝辞

岩国市玖珂町所在の遺跡や出土遺物については岩国市文化スポーツ振興部文化財課 藤田慎一氏よりご教示いただいた。末筆ながら記して感謝いたします。

本稿は科研費(20K01074)の研究成果の一部を含む。

【註】

- 1) 図52は国土地理院2020年発行25,000分の1地形図「安下庄」を使用した。
- 2) 中野1975や上記を引用した八幡1983の記載から、土居地区の杳松遺跡と安下庄地区の杳松遺跡が混同されたと推測する。
- 3) 中野2004第22図で示された毛所遺跡は現在の埋蔵文化財包蔵地付近に相当するが、小字名は「山崎」「恵良」である。一方、中野氏が示した毛所遺跡の地番周辺の小字名は「毛所」であること、標高を除く地理的な記載内容と矛盾しないことから、中野2004第22図の位置は誤りと考えられる。
- 4) 日良居村は昭和30(1955)年4月10日に安下庄町と合併して橘町が発足したことにより廃止された。
- 5) 図54は国土地理院2017年発行25,000分の1地形図「玖珂」を使用した。
- 6) 図54-3は、地図の合成の際にずれが生じたため、標高100m付近までが遺跡範囲になっているが、原図では標高80m以下が遺跡範囲である。
- 7) 石井編1997では遺構が検出された最高点の標高は約98mであるが、調査区南側の墓地及び残存する丘陵の標高との対応関係からおおよそ76mと推定する。

主要参考文献

- 石井龍彦(1989)『清水遺跡』山口県教育委員会(編)山口県埋蔵文化財調査報告第118集,山口
- 石井龍彦(1997)『市井木遺跡』玖珂町教育委員会(編),玖珂(山口)
- 岩国市教育委員会文化財保護課(2023)『玖珂の遺跡』,岩国(山口)
- 小野忠熙(1953)「第四章 島田川の遺跡群」,山口大学島田川遺跡学術調査団(編)『島田川 周防島田川流域の遺跡調査研究報告』,山口
- 小野忠熙(1960)「山口県玖珂盆地の考古学的調査」,山口大学教育学部(編)『山口大学教育学部研究論叢』第10巻第1部,山口
- 小野忠熙(1961)「24 筏山古墳と経塚」『山口県文化財概要第4集 埋蔵文化財』,山口県教育委員会(編),山口
- 小野忠熙・中野一人・山本一朗ほか(1979)「山口県域」,小野忠熙(編)(1979)『高地性集落跡の研究 資料篇』学生社,東京
- 小野忠熙(1985)『山口県の考古学』吉川弘文館,東京
- 岡本定・工藤正(1952)「考古学的に見た周防大島の一断面」,大島文化研究連盟(編)『大島文化研究』第1号,橘(山口)
- 金関 恕(1964)「山陰地方 I」,小林行雄・杉原莊介(編)『弥生式土器集成 本編1』東京堂出版,東京
- 田畑直彦(2006)「山口県島田川流域の弥生集落—中流域遺跡群を中心として—」,日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会(編)『日本考古学協会2006年度愛媛大会発表要旨集』,松山(愛媛)
- 田畑直彦(2014)「周防・長門における弥生時代前期から古墳時代前期前半の土器編年をめぐる研究史と今後の課題」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成22年度—』,山口
- 田畑直彦(2022)「土井ヶ浜遺跡と周辺の集落遺跡の謎」,古代史シンポジウム実行委員会(編)『第7回古代史シンポジウム IN しものせき 資料集』,下関(山口)
- 中野孝之(1975)「周防国屋代島中部(安下庄地区)の遺跡分布について—弥生系遺跡の立地—」,山口県立安下庄高等学校(編)『研究学報1975』,橘(山口)(中野孝之(2004)『大島郡の考古学』,大島(山口)所収)
- 防長史談会(1935)「防長石器時代遺物発見地名表」,防長史談会(編)『防長史学』第6巻第2号,山口
- 八幡熊治郎(1983)「第1章第二節 弥生式文化時代」,橘町史編集委員会(編)『橘町史』,橘(山口)
- 山口県(1980a)『1/50,000土地分類基本調査(地形分類図)「久賀・柱島」』,山口
- 山口県(1980b)『1/50,000土地分類基本調査(地形分類図)「岩国」』,山口
- 山口県観光スポーツ文化振興課(2023)『山口県遺跡地図』,山口

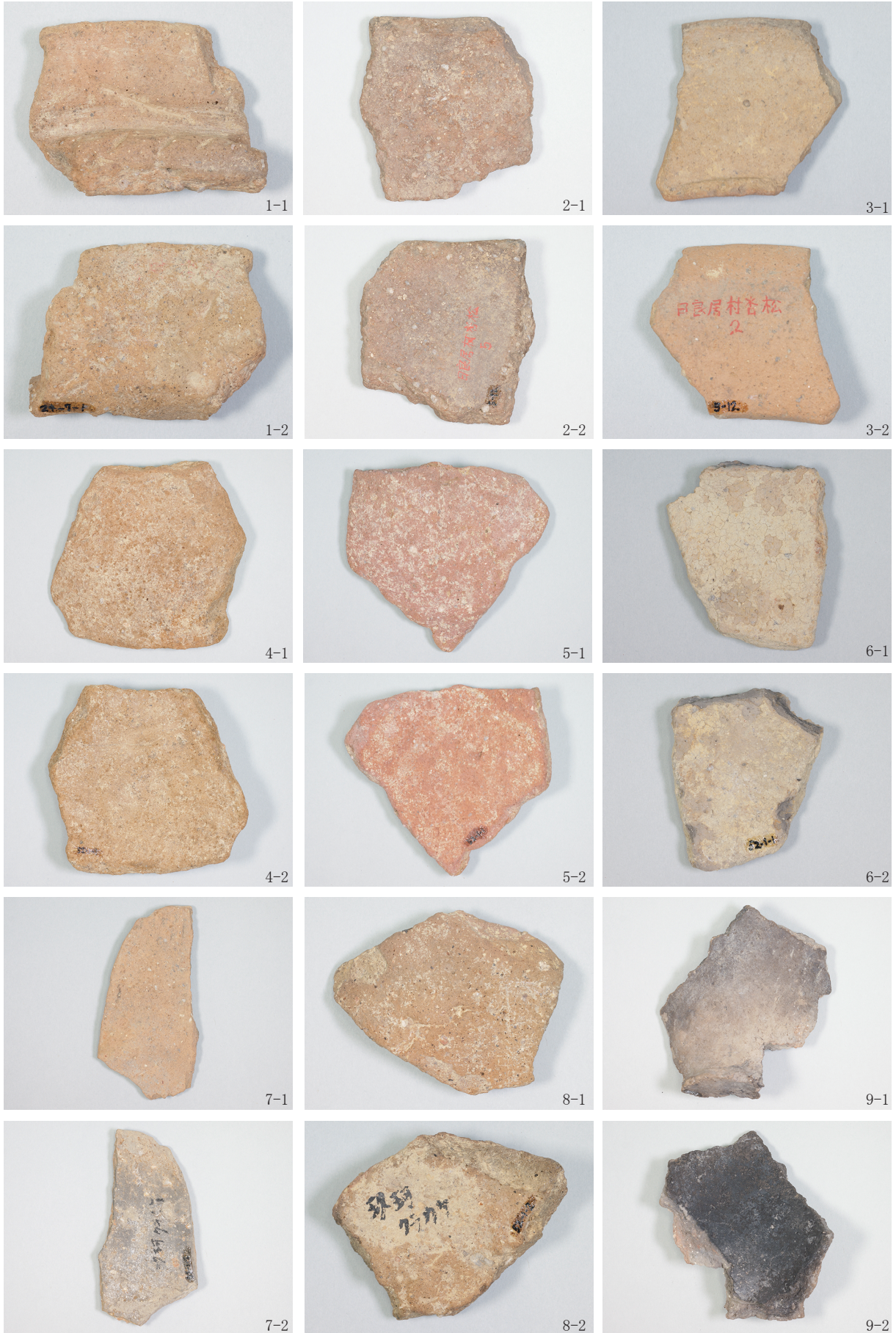


写真 90 出土遺物(土器)①

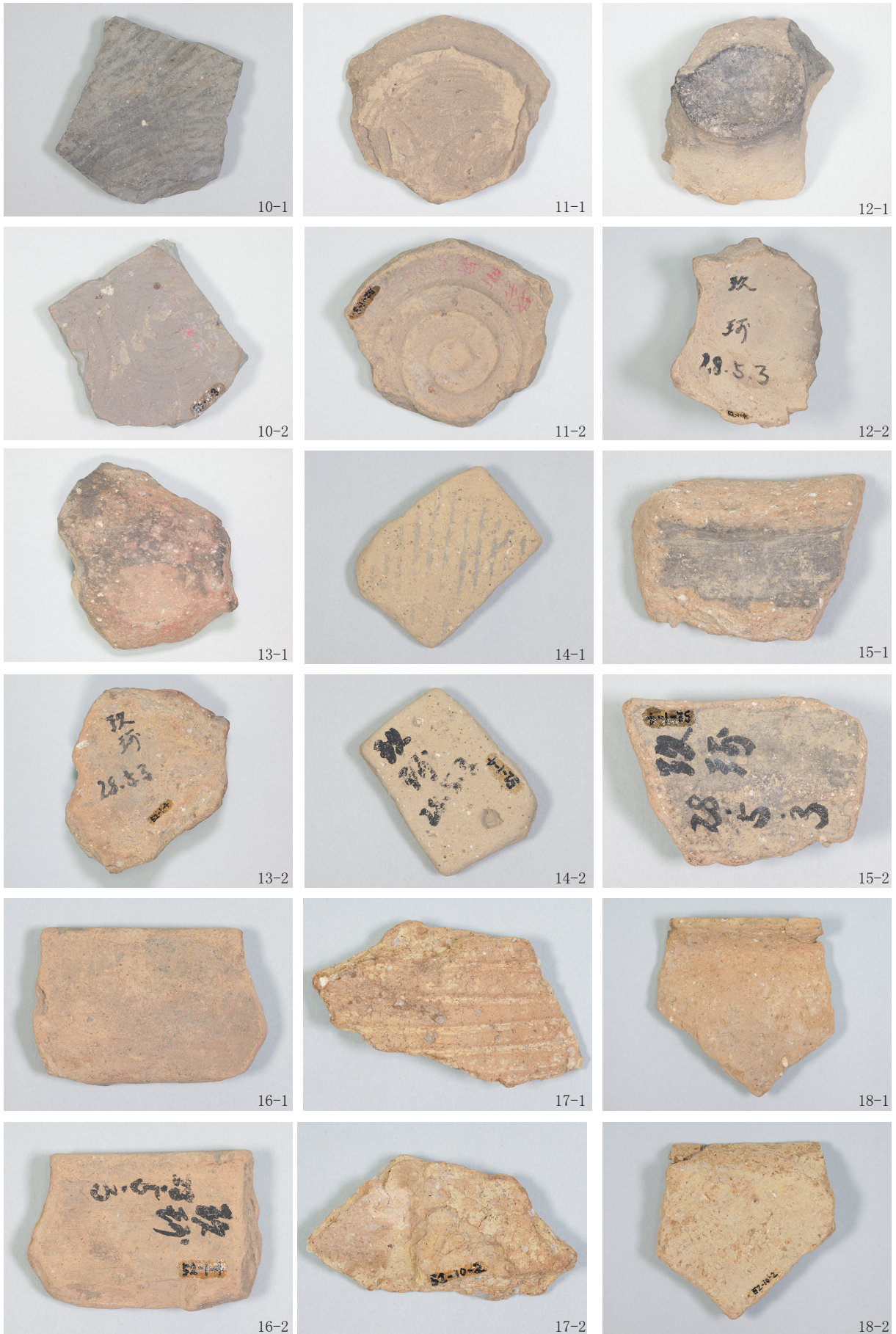


写真 91 出土遺物(土器)②

山口県東部における弥生時代高地性集落出土土器

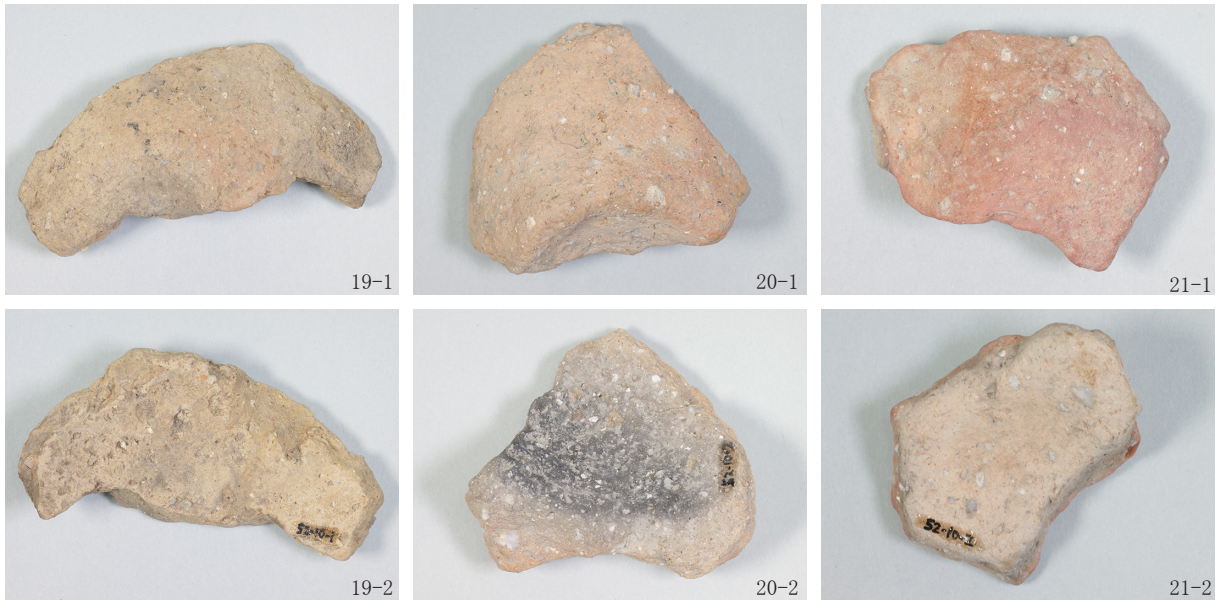


写真 92 出土遺物(土器)③

表26 出土遺物(土器)観察表

遺物番号	遺跡・地区名	器種	部位	法量 (cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考 (4~21はラベルの注記)
					①外面	②内面		
1	杵松遺跡	弥生土器 甕	口縁部			①②にぶい橙色 (7.5YR6/4)	0.5~5mmの砂粒を含む	土器注記:○松 (日良居村杵松か)
2	杵松遺跡	弥生土器 壺か	口縁部か			①②灰黄橙色 (10YR5/2)	0.5~5mmの砂粒を含む	学術調査団による調査 で昭和26年6月2日出土 土器注記:日良居村杵松5
3	杵松遺跡	弥生土器もしくは 土師器 壺	口縁部			①浅黄色 (2.5Y7/3) ②橙色 (7.5YR7/6)	0.5~4mmの砂粒を含む	土器注記:日良居村杵松2
4	植山遺跡	弥生土器 壺	頸部~ 胴部			①灰黄褐色 (10YR6/2) ②にぶい黄褐色 (10YR6/3)	0.5~3mmの砂粒を含む	28.4.29彌生式土器片 玖珂町鞍掛うら (山頂 大土)
5	植山遺跡	弥生土器 壺	頸部~ 胴部			①赤橙色 (10R5/3) ②赤褐色 (10R6/6)	0.5~4mmの砂粒を含む	28.4.29彌生式土器片 玖珂町鞍掛うら (山頂 大土)
6	植山遺跡	弥生土器 壺	頸部~ 胴部			①②灰白色 (5Y8/2)	0.5~3mmの砂粒を含む	28.4.29彌生式土器片 玖珂町鞍掛うら (山頂 大土)
7	植山遺跡	弥生土器 壺	胴部			①にぶい橙色 (7.5YR7/4) ②灰色 (7.5Y6/1)	0.5~4mmの砂粒を含む	28.4.26玖珂くらかけ 中腹 大土
8	植山遺跡	弥生土器 壺もしくは 鉢	底部	②(5.4)		①にぶい褐色 (7.5YR5/4) ②黄褐色 (10YR6/4)	0.5~7mmの砂粒を含む	28.4.26玖珂くらかけ 中腹 大土
9	植山遺跡	弥生土器 甕	胴部~ 底部	②(7.0)		①灰黄色 (2.5YR7/2) ②黒色 (N2/0)	0.5~3mmの砂粒を含む	28.4.29彌生式土器片 玖珂町鞍掛 山麓 土師、祝部 大土
10	植山遺跡	須恵器 甕	胴部			①灰色 (N5/0) ②灰色 (N6/0)	0.5~5mmの砂粒を少量含む	28.4.29彌生式土器片 玖珂町鞍掛 山麓 土師、祝部 大土
11	植山遺跡	土師器 皿	底部	②(5.3)		①にぶい黄褐色 (10YR6/3) ②にぶい黄褐色 (10YR7/4)	0.5~3mmの砂粒を少量含む	28.4.29彌生式土器片 玖珂町鞍掛 山麓 土師、祝部 大土
12	植山遺跡	弥生土器 壺もしくは 鉢	底部	②(5.2)		①にぶい黄褐色 (10YR7/2) ②にぶい黄褐色 (10YR7/3)	0.5~5mmの砂粒を含む	28.5.3玖珂 くらかけ ・ぬの目瓦・土器破片 大土
13	植山遺跡	弥生土器 甕	底部	②(4.0)		①暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) ②にぶい橙色 (2.5YR6/4)	0.5~5mmの砂粒を含む	28.5.3玖珂 くらかけ ・ぬの目瓦・土器破片 大土
14	植山遺跡	須恵器 甕	胴部			①浅黄色 (2.5Y7/3) ②灰黄色 (2.5Y7/2)	0.5~2mmの砂粒を少量含む	28.5.3玖珂 くらかけ ・ぬの目瓦・土器破片 大土
15	植山遺跡	瓦質土器 火鉢	頸部			①②灰色 (7.5Y4/1)	0.5~8mmの砂粒を含む	28.5.3玖珂 くらかけ ・ぬの目瓦・土器破片 大土
16	植山遺跡	土師質土器 焙烙	口縁部			①②にぶい橙色 (7.5YR6/4)	0.5~3mmの砂粒を少量含む	28.5.3玖珂 くらかけ ・ぬの目瓦・土器破片 大土
17	千束遺跡	弥生土器 壺	頸部			①にぶい橙色 (7.5YR6/4) ②にぶい黄褐色 (10YR7/3)	0.5~5mmの砂粒を含む	彌生式土器 玖珂部 高森町千束 大土孝臣 27.1.30 包含層
18	千束遺跡	弥生土器 甕	口縁部~ 胴部			①にぶい橙色 (7.5YR7/4) ②浅黄色 (2.5Y7/3)	0.5~5mmの砂粒を含む	彌生式土器 玖珂部 高森町千束 大土孝臣 27.1.30 包含層
19	千束遺跡	弥生土器 壺もしくは 鉢	底部	②(4.8)		①②浅黄色 (2.5YR7/3) ②の一部灰白色 (2.5Y8/2)	0.5~3mmの砂粒を含む	彌生式土器片 玖珂部 玖珂町千束 小野 2 以下不明
20	千束遺跡	弥生土器 甕	底部	②(4.6)		①にぶい橙色 (5YR7/4) ②黄灰色 (2.5Y6/1)	0.5~6mmの砂粒を含む	彌生式土器 玖珂部 高森町千束 大土孝臣 27.1.30 包含層
21	千束遺跡	弥生土器 甕	底部	②(4.0)		①にぶい橙色 (2.5YR6/4) ②灰白色 (10YR8/2)	0.5~5mmの砂粒を含む	彌生式土器 玖珂部 高森町千束 大土孝臣 27.1.30 包含層